

「ワーク・ライフ・バランスという言葉は捨てます」。自民党総裁選での高市早苗氏の発言に対し、様々な意見が出ました。中には「ワーク・ライフ・バランス」を重視する社会へのいらだちが垣間見える声も。労働政策研究・研修機構労働政策研究所長の濱口桂一郎さんに、日本の「ワーク・ライフ・バランス」の現在地について聞きました。

(田中聡子)

——高市氏の発言をきっかけに「ワーク・ライフ・バランス」に注目が集まりました。

「ワーク・ライフ・バランス」って、実は変な言葉ですよ。この言葉は「ワーク」と「ライフ」が対立を起しているというイメージを与えます。

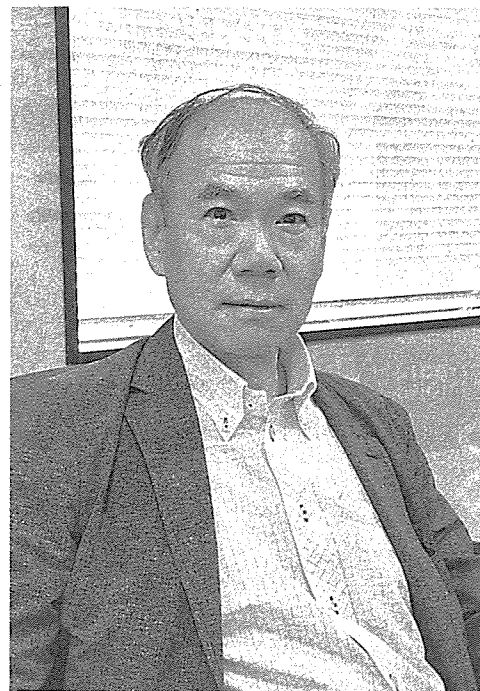
でも家事や育児が「アンペイドワーク(無償労働)」と言われるように、「ライフ」は「ワーク」でもあります。同時に「ワーク」とされるものは「職業生活」という「ライフ」でもある。

——明確に境界線があるわけではないですね。

一般的に、ワークは「マスト(やらねばならない)」の世界、ライフは「ウィル(やりたい)」の世界であると考えられています。でも実際は、家事・育児を誰かが「やらねばならない」ように、仕事も面白さややりがいなど「やりたい」ということもあります。

「ワーク・ライフ・バランス」という言葉は、複雑な現実を単純化してしまいました。そして「ワーク・マスト」「ライフ・ウィル」と考えるから、ライフのためにマストを制限すると「やるべきことをおろそかにしてライフを満喫している」と見られてしまう。——仕事を制限すれば、やはりペナルティーがあります。ワークの世界は、ライフ

境界ない「ワーク」と「ライフ」 仕事の制限、価値見直しを



はまぐち・けいいちろう 1983年旧労働省入省。政策研究大学院大学教授などを経て、2017年から現職。「賃金とは何か」「ジョブ型雇用社会とは何か」など著書多数。

の領域の責任が希薄な人たちを前提にできています。だから育児で仕事を制限する働き方が、「マミートラック」という揶揄するような言葉で表現される。でも私は、「マミートラック」の価値が見直されてもいいと考えています。

「正しい」と

信じる経営者

——どういうことですか。

日本企業は全員が「頑張る」ことが当たり前とされてきましたが、世界的に見れば異例です。諸外国では、少数のエリートは厳しい要求に応える、大多数のノンエリートは与えられた水準の仕事をクリアするだけというのが一般的です。

新幹線で「グリーン車に乗るのが当たり前」なのが日本企業です。それ以外はデッキで立たされる非正規雇用。でも本当は、多くの

人は一応座れる自由席でいいはずですよ。この自由席が「マミートラック」とされる働き方です。現状はグリーン車が「ノーマルトラック」になっています。——なぜそうなったのでしょうか。

戦後の平等主義の中で、エリートとノンエリートの格差がなくなったからです。全ての社員が猛烈に働く文化を作り、正社員であれば平等に扱われる。一概に悪いとは言えません。私は「ガンバリズムの平等主義」と呼んでいます。

でもこれは「がんばれる人の平等」です。がんばれるかどうかは個人の問題ではなく、夜中まで働いている時に子どもの面倒を見ている「銃後の守り」があるからがんばれる。この前提を無視して、そこに女性を投げ込んで、さあ活躍しなさいと競争させられたらしんどいですよね。

——人事考課が「ガンバリズムの平等主義」を補強していませんか？

「ガンバリズムの平等主義」やヒラ社員の評価制度、世界では異例

1990年ごろから「欧米はもっと厳しくやっている」という大きな誤解とセットで、ヒラ社員にも「目標に向かってがんばれ」という評価制度が広がりました。現実には逆で、諸外国ではヒラ社員の評価なんてないのが当たり前です。

——がんばってくれたら、企業には都合がいいですね。結果論としては、そうですね。でも実際は「それが正しい」と思い、その文化の中で成り上がってきた人たちが経営者だから当然なのです。だから企業サイドから見た時、現状を変えるロジックってあまりないんですよ。」「正しい」ことであり、ヒラ社員が意欲的に働いてくれる。

世代交代で 変化生まれる

——あまり希望が見いだせないですね。社会全体で見ると、今は移行期なのだと思います。男女ともに「転職がある仕事は絶対にいやだ」というような考え方が広がっている若い世代と、中高年層との感覚の違いが表面化しています。世代交代によって変化は生まれるでしょう。

もう一つ必要なのは、「ガンバリズム」的な働き方に「ついていけない」「嫌だ」という人たちが振り落とさない形で、「がんばる人」をどう選ぶか考えることです。しかし、「社会は平等になった」と感じている人たちにとっては不愉快な話でもあり、納得できるかどうか。難しいかもしれませんね。



www.asahi.com/relife/



読者会議プレゼントキャンペーン

熱意は歩いた歩数で決まる。

AI、チャットGPT、リモート、会わなくて済むツール大活躍。でも、やっぱり微のずかに会いたい！「お百度作戦」は不滅です。



加藤 登紀子の
「ひらり」